

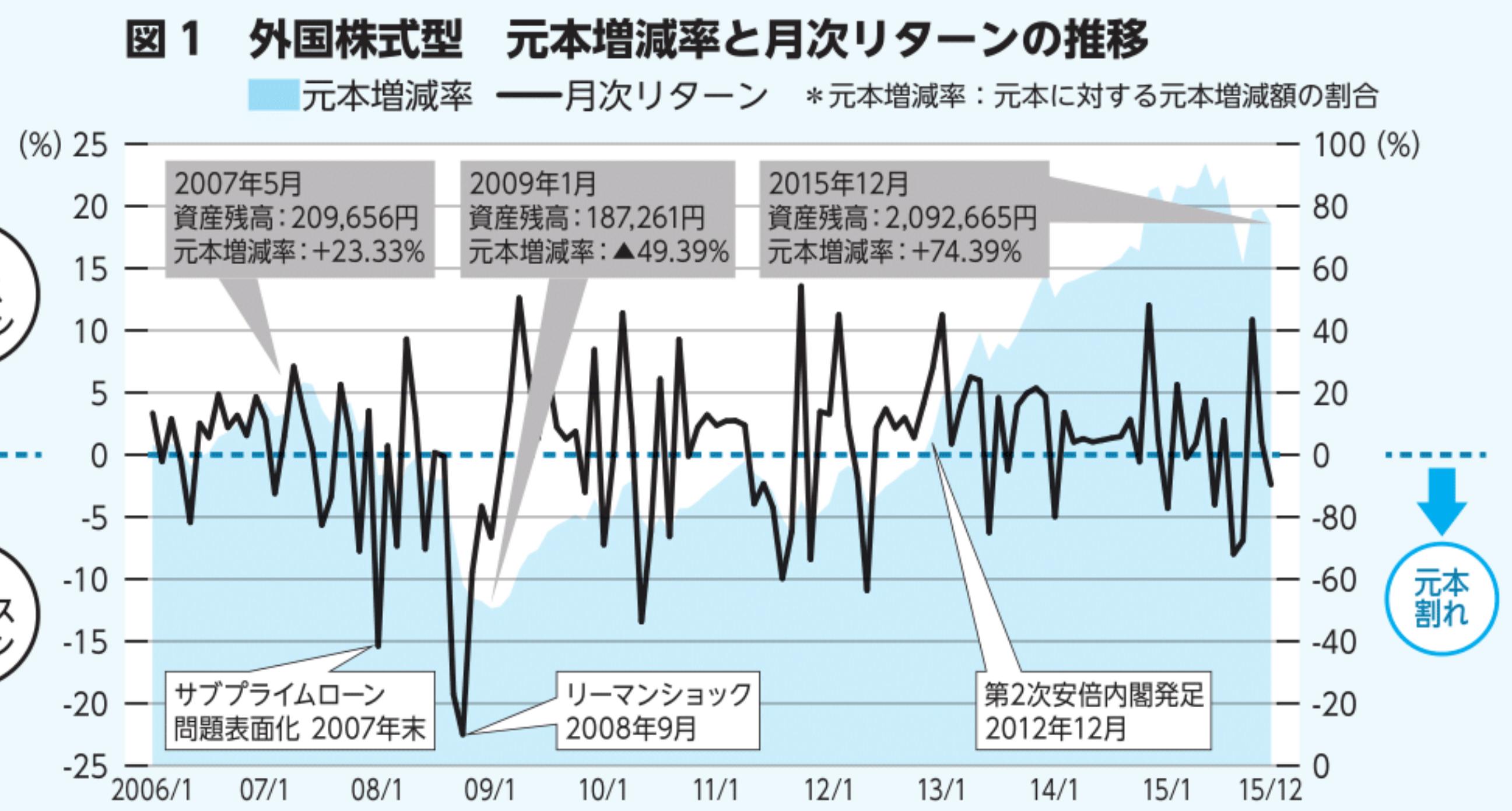
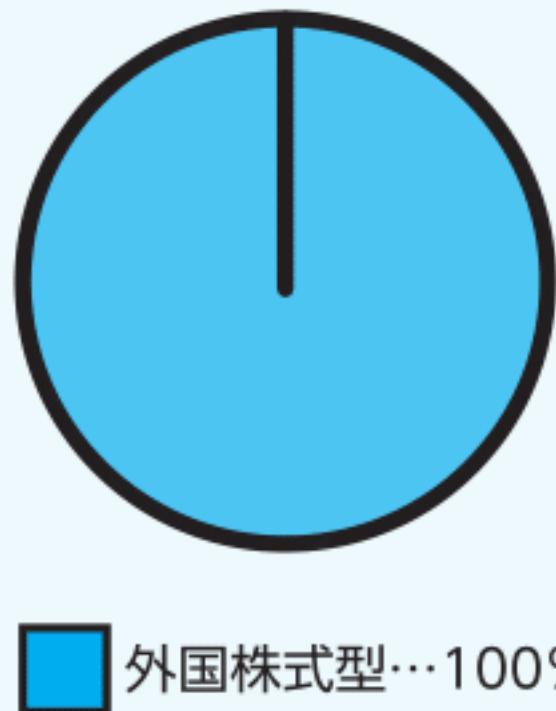
# 高収益をねらう 利回り重視タイプ

もうけたいぞう  
猛家泰三さん(35歳)



## DATA

## ポートフォリオ



## 2006年～2007年の運用状況

## 短期では高い收益率を確保

2006年1月の運用開始後しばらくは、マイナス利回りとなる月もあるものの、資産残高は順調に増加し、約1年半後の2007年5月には、元本17万円に対し資産残高20万9,656円、元本に対する増減率はプラス23.33%となり、短期では高い收益率を出しています。

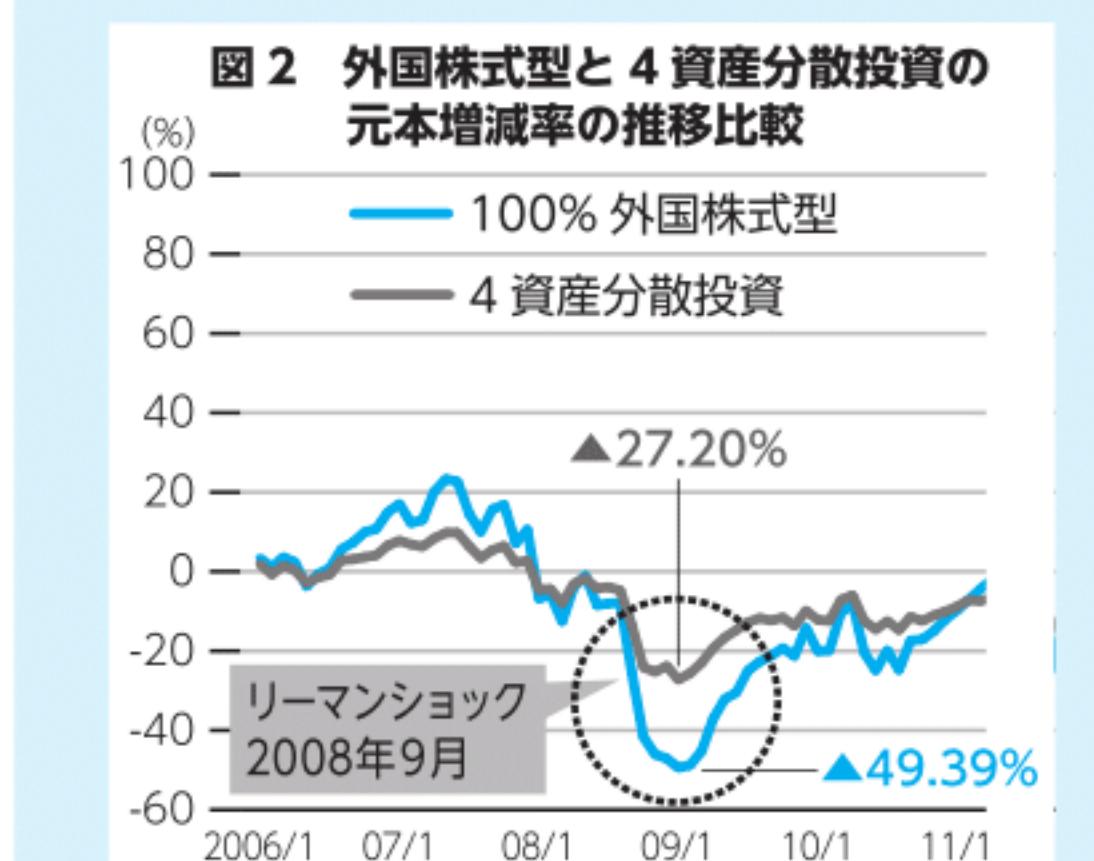
## 2008年～2009年の運用状況

## リーマンショックで資産残高が元本の約半分に

資産が順調に積み上がっていきことに満足の猛家さんでしたが、2008年1月から状況が変わります。この月、月次リターンがマイナス15%となったのを機に資産が元本割れに転じます。世間では米国のサブプライムローン問題が表面化しつつあったころです。そして2008年9月15日、いわゆるリーマンショックが起こり、翌2009年1月には、元本37万円に対して資産残高は18万7,261円となり、元本の約半分を失う事態となりました。

### 比べてみよう もしも4資産に分散投資していたら…

図2は、猛家さんと同じ時期から同じ拠出額(毎月1万円)で伝統4資産に均等に分散投資した場合との比較です。分散投資をしていても、リーマンショック時には元本を約3割割り込んでおり、リーマンショックが資産の種類によらず値を押し下げるインパクトの大きな出来事だったとわかります。しかし、グラフからもわかるように、分散投資ていれば、外国株式型に集中投資するよりは資産の目減りが緩やかであったのは間違いありません。



## 2010年～2012年の運用状況

## リーマンショックから約4年後に元本を回復

リーマンショックによって元本の約半分を失った猛家さんですが、その後は多忙ということもあり、状況をしばらく静観していました。そして約4年後、第2次安倍内閣発足直前の2012年11月、元本はようやくトントンのレベルにまで回復しました。

## 2013年～2015年の運用状況

## アベノミクスで資産残高は大幅アップ

その後はアベノミクスに乗って資産を増やし、リーマンショックから約7年後、運用開始から約10年後の2015年12月には、元本120万円に対し、資産残高は209万2,665円、元本に対する増減率プラス74.39%にまでなりました。

## ここからわかること

## ①リスク性の高い資産も長期運用により収益が安定

10年間の推移を見て、「結局、元本が7割も増えたのなら、リスク性の高い資産に集中投資してもいいのでは」と思った方もいるかもしれません。確かに、猛家さんのケースのように、リスク性の高い資産でも、運用が長期になればトータルリターンは比較的安定してきます。ですから、年齢が若い人ならば、退職まで長期の運用期間を確保できるため、ある程度リスク性の高い資産での運用も許容できると言えます。ただし、現時点で運用成績がよくても、この先もずっとよいとは言えません。運用環境の悪化により再び資産残高が大きく減少することもあることを忘れてはいけません。

## ②ライフステージに応じて利益の確定を

たとえば猛家さんが50歳代後半までリスク性の高い資産に投資し、それなりの資産を築いたあとで、突然的に運用環境の悪化を招く出来事が起きた場合は、目減りした資産を回復させる十分な時間がないまま退職を迎える可能性も十分に考えられます。年齢が若いちはリスク性の高い資産への集中投資も選択肢となりますが、退職までの年数がわずかになってきたら、徐々に利益を確定し、安全性の高い資産へ切り替えていくことが重要です。



## ③やみくもにもうけを追求する運用はDCにはそぐわない

DCは、さまざまな優遇措置により、現役時代のできるだけ早い段階から老後に向けての資産形成を促す制度です。運用商品の資料を見ていると、短期的に魅力的な收益率をたたき出している商品についつい引かれてしまいますが、目的もなくもうけを求めるのではなく、老後の暮らし方や、退職後に確保できるその他の資産等を考慮に入れながら、現実的な運用目標を持ち、確実に資産形成をすることが大切です。